

市民総参加のリサイクル

宝地区に引き続き 谷村・三吉・開地・盛里地



ません。

アルミ缶のリサイクルが、省エネの面でも脚光を浴びているのはこのためです。具体的に想定してみると、アルミ缶一個をつくるエネルギーの差は、四〇ワットの電球を半日つけっぱなしにしておけるだけの熱量に相当します。

古紙

アルミ

缶と並んで、リサイクル効果の高いものに紙（古紙）があります。

『古紙』一トンは、

直系一四

センチ、高さ八メートルの立木二十本分に相当する』といっています。

これまで、紙のリサイクルは、森林資源の有効利用と製紙原料の確保といった面からいわれてきました。しかし、最近では、ごみ処理問題や、省エネルギーの面からも、利用の必要性が叫ばれています。

リサイクルと

ごみ減量

ところで、なぜ紙のリサイクルが、ごみ処理の問題と関係があるのでしょうか。答えは簡単です。



ごみの中に占める紙の割合が高いからです。都留市を例にとってみましょう。昨年度市内の各家庭から出された可燃ごみの量は、六千六三三トン。このうち、四二％が紙類で、そのなかには、新聞雑誌なども多く含まれているはずなんです。これらをごみとしてではなく、資源として回収できれば、その分ごみを減らすことができるというわけです。そのうえ、ごみの軽減はごみ処理経費の節約にもつながります。

ごみはタダとお考えの皆さんも多いかと思いますが、実際そうではないのです。昨年度、大月・都留広域事務組合でごみ処理にかかった経費は約六億円。市民一人当たり換算すると約二万円かかったことになりました。リサイクルが進めば、資源として回収された分は焼却されたり埋めたりされるはずのごみがなくなっていることになります。

同時に、ごみを減らすということ、すなわち物をむやみに捨て去らないことと、そこから資源を回収しようという試みは、地球の限りある資源を根こそぎ使い果たしかねない勢いにブレーキをかけ、地球的規模の環境汚染に待ったをかける原動力になります。

市民一人ひとりがリサイクルを理解し、実践していくことがごみ減量の実現に結び付いていくはずです。皆さんのご協力をお願いいたします。